Ⅰ　19世紀ヨーロッパの医学

鎖国政策をとった江戸時代、わが国の医師が学び得た西洋医学は、長崎のオランダ商館を通じてもたらされた僅かなもので、特に18世紀のオランダ医学（蘭学）を、主に書籍から学んだ。又、明治時代にはヨーロッパ文明の導入に専心し、医学では19世紀後半のあの隆盛を誇ったドイツ医学に学んだ。しかし、18世紀の近世オランダ医学と19世紀後半の近代ドイツ医学との間には、フランス、特にパリを中心とした医学者の活躍のあったことを見逃すわけにはいかない。これがビシャー、ピネル、コルビザール、ラエンネック等のパリ学派と呼ばれる一群の医学者たちである。

1.　パリ学派の誕生と成熟

18世紀のフランスの医学は、モンペリエの僅かな活気が見られたものの、全体的には沈滞していた。しかし、18世紀末に勃発したフランス革命（1789）は、医学、医療にも大きな影響を及ぼし、医療及び医学教育も再建に向かっていった。荒廃したフランス社会に、新たな医学校「健康学校」（Ecole de Sante）がパリ、モンペリエ及びストラスブールに生まれた。

パリの「健康学校」は、1795年にトゥーレ（Michel Augustin Thouret, 1748-1810）を校長として開校され、ピネル、コルビザール、ショパール等の新進気鋭の教授が着任した。実地修練の病院としては、新たに作られた「学校附属病院」、オテル・ディユを改組した「人類病院」、パリ最良の病院であったシャリテを拡充した「統一病院」があてられ、臨床医学あるいは病院実習を中心とした教育が

上：写真　87　下：写真　88

写真　87　フィリップ・ピネル（1755－1826）の肖像：フランス医学アカデミー（パリ）

写真　88　ピネルによる精神病患者の鎖からの開放：サルペトリエール病院（パリ）